

京まち工房



SPRING
情報交流誌

no.

30

(財)京都市景観・まちづくりセンター ニュースレター

パートナーシップで進めるまちづくり

「ふれあい」、「思いやり」 安心・安全のまちづくり



かつてこれほど子どもたちの安心・安全について話題になったことがあったでしょうか？子どもを狙った凶悪な犯罪が報道され、登下校中の不安が広がると同時に学校内の安全まで脅かされています。また、健やかに育っていると思っていた子どもが凶悪な犯罪をする事件も起き、「自分の子どもは大丈夫だろうか？」と不安に思われる方もあるのではないのでしょうか。

親や先生の目の届かないところで子どもをどうやって守ったらいいのか、また親や先生以外の大人からしつけられる機会が減る中で、どうやって子どもを健全に育てるのか。子どもたちを大人が見守り育てる顔の見えるつながりが

薄れつつある中で、地域が果たす役割は大きいと思われるます。

また、最近は大地震や台風などの自然災害、高齢者が巻き込まれる事故や犯罪の増加など、生活のあらゆる分野の安心・安全が人々の話題に上っています。地域の中でも、まちづくりの課題として「安心して暮らせるまち」を目指す取組が始まっています。

今回の特集「安心・安全のまちづくり」は、昨年京都市内の各地域で行われた「安心・安全」についての取組のうち、景観・まちづくりセンターが関わった事例を中心に紹介いたします。

吉祥院学区における安心安全のまちづくり

吉祥院学区安心安全ワークショップ

南区吉祥院学区のあたりは、都が奈良から長岡に移された時、重臣だった菅原家が領地として賜った場所で、菅原道真公の生誕地といわれており、周辺には道真公ゆかりの井戸や森などの遺構が数多く残されています。

昭和6年に吉祥院村が京都市に編入された後、土地区画整理事業による開発が進み、特に昭和20年代以降、豊かな田園地帯は工業地帯へと大きく変貌していきました。

平成16年現在の吉祥院学区の人口は約1万人で、やや増加傾向にあります。これは、農地や工場跡地へマンションなどが建設されたことが要因になっており、小学校児童数も近年の少子化の中にあっても横ばい傾向となっています。また、国道171号線の南側に隣接することに加え、学区の南北方向に通る西大路通や、土地区画整理事業による道路整備で学区内の通過交通が多くなり、子どもやお年寄りの安全面に関する様々な課題を抱えています。

京都市景観・まちづくりセンターは、「吉祥院ふれあい実行委員会」からの委託により、「吉祥院学区安心安全ワークショップ」の企画運営を行い、地域の活動のお手伝いをさせていただきました。

住民主体の地域活動



吉祥院・ふれあいジャンボリー

吉祥院学区では、自治連合会や学区の各種団体を中心に、子どもの安全を守るための声かけ運動や、介護施設等と連携したお年寄りを支える取組など、地域の安心・安全に関する活動が積極的に展開されてきました。

また、平成8年2月に設立された「ふれあい吉祥院実行委員会」を中心に、「吉祥院・ふれあいジャンボリー」や「吉祥院・ふれあいひろば講演会」など「こころふれあうまちづくり」を目指す取組が行われ、最近では、児童館や老人介護施設との連携、小・中学校及び大型商業施設などの協力による「わいわい人権フェスティバル」の開催など、地域交流が着実に進められています。更に、同委員会では、「安心・安全ネットワーク」、「教育ネットワーク」、「高齢者ネットワーク」を中心とする「地域住民の暮らしを支えるネットワーク」の構築を図るための具体的な取組が計画されるなど、学区民を主体とする新たな地域づくりも始まろうとしています。

こうした様々な活動を背景に、吉祥院学区は、京都市が平成16年度から進める「地域の安心安全ネットワーク形成事業」のモデル地区に選ばれました。このモデル地区では、全市の先駆けとなる学区単位の「安心安全のまちづくり」が検討されることになり、吉祥院学区安心安全ワークショップも、この取組の一環として、「吉祥院自治連合会」と「ふれあい吉祥院実行委員会」を中心に、多くの学区民の参加によって実施されました。



わいわい人権フェスティバル

吉祥院学区安心安全ワークショップ

「吉祥院学区安心安全ワークショップ」は、学区における地域の課題に対してより多くの学区民が主体的に取り組むことを目指して、吉祥院学区内に居住・通勤されている方々を対象に、平成16年の10～11月に全3回行われました。各回の進行は立命館大学産業社会学部の乾亨教授に務めていただき、一般参加者、オブザーバー、スタッフを合わせ毎回100名近くの方々が参加されました。

第1回では「子ども」、第2回では「お年寄り」の安心・安全という視点から現状の学区の課題と魅力の洗い出しを行いました。施設整備等に関する部分（ハード面）、地域住民が協力して取り組む部分（ソフト面）ともに数多くの意見が出されましたが、ハード面の課題として「通過車両」、「路上駐車」といった交通の問題が多くの方々の共通の課題となっていることが浮き彫りになりました。

また、ソフト面としては、学区全体として「コミュニティが活発」、「住みやすい」という意見があった反面、不十分な部分として、「世代間やマンション住民との交流が少ない」という意見も多く挙げられました。一方で、学区の資源として「公園」や「福祉施設」が多いことや、「声かけ運動」など既存の取組に対する評価が高いことも明らかになりました。

第3回のワークショップでは、前回までに出された内容を踏まえて、今後の吉祥院学区の安心・安全のまちづくりに向けて検討を行いました。意見交換の中で、吉祥院学区の安心・安全のまちづくりのためには行政と連携して取り組むハード面の課題も重要だが、安心・安全のまちづくり全般に通じる「人と人とのつながり」というソフト面が非常に重要だということが参加者の間で確認されました。また、今後の具体的な取組についても、「顔見知りを増やす」ことや、「あいさつを心がける」など身近なものから、「各世代が交流できる行事をつくる」といったものまで、多種多様なアイデアが得られ、これらのアイデアにおいて、学区内の資源として確認された「公園」や「福祉施設」を「うまく使っていく」ということも今後の方向性として認識されました。そして、これらについて、今回のワークショップに参加された方々が、積極的に「自分たちでやっていく!」という意識を持ったことが、ワークショップ全体を通じての大きな成果となりました。

地域の安心・安全は「ふれあい」と「交流」から

今回のワークショップを通じて「ふれあい」と「交流」というキーワードを得ることができました。参加者からは、「自分以外の学区民の意見を聞くことで学区に対する認識が深まった」、「学区の安心・安全なまちづくりに向けて、今回出てきたアイデアを実現させていきたい」といった感想が挙げられ、ワークショップで出されたこれらの様々な意見が、多くの参加者の方々の共通認識となったことも重



安心安全ワークショップ

要な成果でした。

また、マンションにお住まいの方で、これまであまり地域活動に参加していなかった方々が参加されるなど、今回のワークショップ自体が、幅広い世代や、古くからの住民だけではなく新たに入って来られた方など、「学区民が知り合う場」にもなりました。

今後の取組について

今後の吉祥院学区のまちづくりについて、吉祥院学区自治連合会の野村良博会長から「今回のワークショップに参加して、学区の方々が様々な意見を持っていることを認識しました。皆さんの意見を参考にして、地域が一丸となって安心して住めるまちを目指していきたい」というお話や、ふれあい吉祥院実行委員会の増山忠雄委員長から「今後、具体的な行動を起こすに当たって、重要なことはコミュニケーションであると思います。コミュニケーションの形成の場の一つとして、ワークショップで地域の資源と確認された公園の活用について取り組んでいきたい」といったご意見をいただきました。

今後は、今回のワークショップの参加者が中心となり、「参加者同士のネットワーク」、更には「学区全体のネットワーク」へ広がり、「ふれあい」と「交流」を基盤としたまちづくりが進められることが期待されます。

また、今回のワークショップに参加した立命館大学乾ゼミの学生たちが、今後も吉祥院学区と関わりを持つことにもなりました。ワークショップ後には、学生たちによるまち歩きが行われ、学区に対する様々な意見が語られました。

学生による「外からの視点」や「発想」、「行動力」を生かしていくことは、今後の吉祥院学区のまちづくりの大きな力になると思われます。

地域安心安全ネットワークでの取組を通して

修徳安心安全推進委員会

修徳学区では、京都市の「地域の安心安全ネットワーク形成事業」のモデル地区として「修徳安心安全推進委員会」を平成16年8月に立ち上げました。「修徳学区安心安全アンケート」をはじめとして、「声かけ愛のたすきリレー」、「修徳・キッズサポーターズ愛の家キャラバン隊」、「安心安全携帯愛のメールフレンドチーム」、「愛の家庭・企業訪問」、「修徳仮想マンション町内会」、「巡回箱の設置」、「愛の応急手当講習会」といった、「愛＝他人に対する思いやり」がキーワードの取組を行ってきました。



声かけたすきリレー

京都市景観・まちづくりセンターは、修徳安心安全推進委員会の関係機関委員として、活動に参加してきました。

『安心・安全』とは良く言われることですが、それは何、と言われればすぐには出て来ない。それを自分なりに考えてみたら、他人への思いやり、隣の人との交流、付き合い、つまり『愛』なのではないかと私は思いました。そこから、『愛』をキーワードに取組を

進めていってはどうだろうと思ひ浮かんだのです」と、修徳学区の自治連合会長でもある修徳安心安全推進委員会の平井委員長はおっしゃっています。

具体的な取組では

最初、修徳学区では安心・安全に関する防災マップを作ろうという案が出ていました。しかし、それを作って後々の活動につなげることができるのだろうか、ということに疑問を覚えられたそうです。「地図は作ってもすぐ捨てられてしまう。作る過程は重要だと思うが、完成品が後々まで役に立つとは思えない。また、やるからにはできることをとことんやりたい」ということで、まず、安心・安全に関するアンケートを実施することになりました。



返ってきたアンケートから、高齢者の世帯が多いこともあるのか、日常的に不安を感じている方が学区民の中には意外と多いことが分かりました。そこから、「顔見知りが増えれば不安は解消されるのでは」と考え、「声かけ運動」を思い付かれたそうです。

毎日通学中の子どもたちを主な対象に午前7時50分から午前8時5分までの15分間、「声かけ」、「挨拶」が行われました。学区内21町内のすべてが、たすきをリレーしながら当番制で活動されたそうです。

最初は、町内の参加人数が少ないのでは、また、10人にも満たないのではと心配されていたようですが、ふたを開けてみると常時10人程度、多いところでは18人の参加があったそうです。「この取組を馬鹿にしたり、挨拶をしている通りを避けて行く人もいました。しかし、子どもたちはだんだん慣れてくれて、顔見知りになっていきました。

会長として毎日声かけ運動の中を自転車で回っていましたが、『会長さんも頑張っているのだから、自分も頑張ろう』と思ってくれるのも嬉しかったです」と平井委員長。延べ約2000人の参加と約14,000人の通勤・通学者を数え、学区の取組としては大成功と言えるのではないのでしょうか。

その他、様々な取組をしていた修徳学区ですが、新聞、テレビなどのマスコミもこの取組を取り上げ、それがまた修徳学区民にとっての刺激と励みにもなったようです。

取組を終えて

盛りだくさんの事業をこの半年間の中で行ってきた修徳学区ですが、「これだけのことができたのは、ここ修徳の土地があつてのことだ」と思います。予算だけでなく、行動するだけのモチベーションと普段からの積み重ねがあつてこそ、これらの取組が終わった後も楽しか



ったと皆さんが言ってくださるのだと思っています」と平井委員長。

今後も修徳まちづくり委員会を中心にここまでの事業を引き継ぎ、この取組をなんらかの形で継続していく予定です。この取組のおかげで、自分たちの地域のポテンシャルの

高さを認識し、行政、学校、そして学区民間のネットワークを強化することができました。この経験を活かしていっそう地域のつながりを深めていく修徳学区。今後は楽しみです。

京都市における「地域の安心安全ネットワーク形成事業」とは？

京都市の「地域の安心安全ネットワーク形成事業」は、平成16年6月にスタートしました。この事業は、住民（各種団体）と警察・消防、大学などが連携し、これまで分野別に縦割りで行われてきた防犯、防災、子どもの安全、地域福祉などの活動を総合的に結びつけ、地域の安心と安全の確保に取り組む地域横断的なネットワークの構築を目指す新たな取組です。

今年度は、モデル地区としては、六原学区（東山区）、修徳学区（下京区）、吉祥院学区（南区）、砂川学区（伏見区）の4学区がモデル地区に選ばれました。8月には学区ごとに推進組織が設置され、12月まで

に具体的な取組が行われました。京都市は平成17年度までに、全行政区でモデル事業を実施する予定です。京都市地域づくり推進課では、「防犯や防災だけでなく大学、企業との連携、高齢者問題など、地域特性に応じた様々な取組が展開されることを期待しています」。

砂川学区

砂川学区では、従前から活発な活動を行っていた自治連合会をはじめとする各種団体に、大学生、大学職員も加わって安心安全に関するワークショップを全5回開催しました。

消防署・警察署や土木事務所もディスカッションに参加。また、「安

心・安全まちづくりに関する大学生の意識調査、「砂川・まちキラッと運動（門灯をつける運動）」、「防犯・防災パトロールの実施」、「砂川学区安全推進委員会にゆーすの発行」などの取組を行いました。

六原学区

六原学区では、安心・安全に関する防犯マップが作成されました。また、「子ども防災訓練（炊き出し体験）」、「防犯教室の開催」、「門灯をつける運動」などを行いました。

平成17年度以降は、安心・安全のまちづくりのための勉強会や、「安・安マップ」の点検及び更新、危険箇所パトロール等を行う予定です。

城巽学区（中京区）の取組

子どもの安全は、まず子どもを知ることから

子どもたちの安全・安心を考える中で「子どもたちと地域」というテーマに目を向けたのが、平成14年度のまちづくり活動助成の実施以降、京都市景観・まちづくりセンターがまちづくりのお手伝いを行っている中京区の城巽学区です。子どもが巻き込まれる様々な事件が多数報道され、地域社会が子どもたちを見守り育てる力が弱くなったのではないかと問いがきっかけでした。地域のコミュニティを再生すると、子どもたちの安全・安心を守る活動は密接につながっているかもしれないと話し合われたのです。

背景

中京区では近年マンション建設が進み、90年代に落ち込んだ人口が再び増加しています。城巽学区では、平成12年の調査で69%の世帯が共同住宅に住んでいます。しかし近年増えている共同住宅の人々が、従来の自治活動に参加する機会は少なく、コミュニティの希薄化が課題になっていました。

このような状況で4年前に地域のまちづくりを考える「城巽五彩の会」が結成され、住みやすく、訪れて楽しいまちにするために住民自身でできる活動が始まりました。

従来の自治活動の母体である自治連合会は参加者が同じ顔ぶれになりがちなので、自治連合会の下部組織ですが、できるだけ多くの人に参加できるような運営が行われてきました。（ニュースレター18号（平成14年3月）で特集）

地域の子どもたちの顔を知る

子どもたちの安全・安心を考えるうえでは、保護者の意見が欠かせません。小学校・中学校のPTA、自治連合会、城巽五彩の会などのメンバーが集まり、日ごろの子育てをしている実感に基づき意見交換を行いました。その結果、「あいさつが町内の付き合いの基本」、「子育てを通じて近所づきあいやPTAのつきあいが始まる」、「子どもたちの通学・遊び範囲が広がった」、「大人の目が行き届いているか不安」、「近くに遊び場がない。公園も不安を感じる」などの意見が出ました。話題の中心は「遊び」と「遊び場」で、まちなかに安全・安心な遊び場がなく、近所の子どもの顔を知らないこともあり、地域で子どもを守る人間関係が薄らいでいることの問題点が浮かび上がってきました。城巽学区では小学校の統廃合の結果、通学エリアが2つの小学校に分



かれ、従来の自治活動の範囲と異なっています。そのためPTAと自治連合会等と一緒に活動する機会が減り、近所にどんな子がいるのか見えにくくなっているようです。

そこで「遊び」と「遊び場」をテーマに、楽しく遊びながら大人と子どもが相互に理解を深め、顔なじみがひとりでも増えるように、「城巽・子どもたちと一緒に宝さがし」が行われました。コマまわし、めんこ、紙鉄砲、樟脳舟などの昔懐かしい遊びやフラフープなどの外遊び、マジック教室やおもちゃライブラリーなど、小学生を中心に約60名が参加しました。地域の大人が教えてくれる遊びは新鮮だったようで、子どもたちは紙鉄砲やめんこで一心不乱に遊んでいました。おもちゃライブラリーは会場が体育館という広い場所だったせいも、存分に遊ぶことができたようです。



また、大きな地図に普段どこで遊んでいるか、どんな危険や不安を感じたか、子どもたちには今の様子を、大人たちには昔を思い出して書いてもらいました。その結果、昔の遊び場はほとんどが

路上であったが今では公園・学校が8割を占めることから、交通量が増え路上が遊び場でなくなったことが分かります。また昔は近隣がほとんどであった遊び場が、今では城巽・本能・龍池・明倫の4学区の外が7割を占めることから、子どもの生活圏が広がったことが分かります。

路上遊びの実現

4月29日(木、祝)には、安全なまちのイメージを探るために、通りを通行止めにして昔ながらの路上での遊びを実現する「子どもたちと一緒に昔あそび」を行いました。

これは、KBS京都(地元TV局)と「歩いて暮らせるまちづくり推進会議」(まちづくり団体)が企画する交通安全キャンペーン「かたつむり大作戦」に合わせたものです。

学区にある高松神明神社の前の道を車両通行止めにして、路上で行う遊びと神社の境内で行う遊びで楽しみました。子どもと大人で97名とスタッフ20名が参加し、前回以上ににぎわいました。城巽学区に住む児童・幼児の2割近くが参加したことになります。交通安全キャンペーンということで警察による紙芝居が上演されたり、消防分団が交通整理に当たったりと、各種団体・組織の協力も得られました。

城巽地蔵盆

8月、京都では子どもの健やかな成長を願って、各地で地蔵盆が行われます。城巽学区内でも各町で行われますが、近年建ったマンションなどは町内会に加入していない場合があり、子どもたちの参加が困難です。そこで、マンションに居住し町内の地蔵盆に参加できない子どもたちに呼びかけて、城巽自治連合会主催により学区全体の地蔵盆が行われました。ここでも城巽五彩の会や城巽中学校の同窓会である心町衆、小学校や中学校のPTAといった、これま

でのまちづくり活動や宝探し、昔あそびなどで培われたネットワークが活かされ、参加者の募集やプログラムの工夫が行われました。

参加者は子ども42名、大人41名、スタッフ20名と、マンションだけに声をかけたにしては多くの参加があり、伝統行事、京都文化に対する関心の高さが見られました。またプログラムには通常の地蔵盆行事に加え、これまでの取組で好評だった昔あそびや楽器作りなど親子で楽しめる工夫がされており、また参加したいとの声も多かったようです。

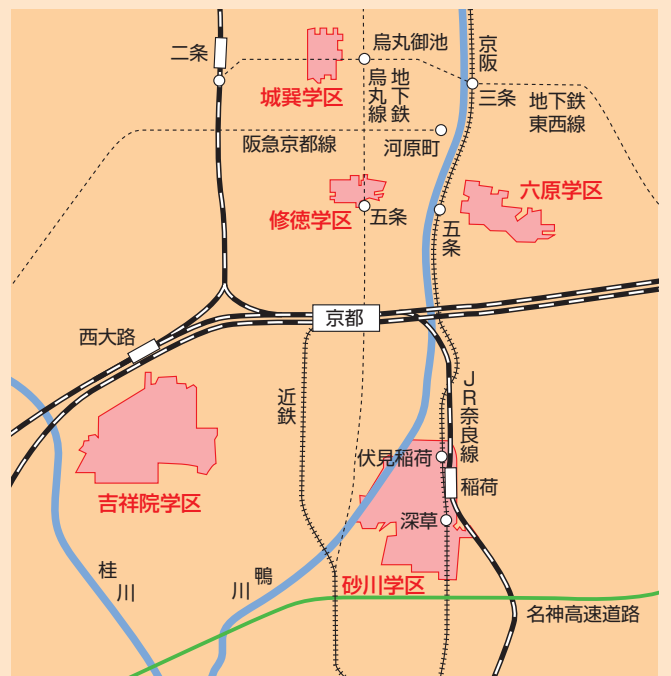


既存の町内にとって、顔の見えにくいマンション住民とどうやって付き合っていくかということとは長年の課題ですが、これをきっかけに交流が促進されることが期待されます。

コミュニティの再生と子どもたちの安全・安心

子どもの安全・安心を考える中で「子どもたちと地域」に目を向ける。城巽学区の取組では、自治連合会、PTA等の若い世代、まちづくり組織のメンバー、防犯防災に関わる組織といった、様々な役割の組織や幅広い年代にまたがる人々が集まり話し合うことによって、実施されてきました。また犯罪・交通事故のデータの提供やイベントの実施に警察の協力を得たり、広報にマスコミの協力も得るなど、外部の協力も大きかったようです。地域に住む幅広い人材を活用することが、コミュニティの再生にもつながり、子どもたちの安全・安心に役立つ。そのような流れが見えてきた、城巽学区の取組です。

※本稿執筆に当たっては、財団法人社会安全研究財団平成15年度研究助成〈A一般研究助成〉による研究成果の一部を援用しています。



京町家の保全・再生の事例

～安心して暮らし やすいすまいに～

N邸 (中京区)



表の格子も新しくなりました

中京区、西ノ京円町の近くの閑静な町並みの中に、今回取材にご協力いただいたN邸はあります。

耐震面に十分配慮し、より暮らしやすいすま

いを目指して改修工事が行われました。

今回改修された家屋は、もともと農家の家屋として建てられたもので、建坪約40坪、中二階で虫籠窓を持つ、築140年という歴史を有するどっしりとした母屋です。

このように長い歴史を有する建築物ですが、所有者の方は以前から、耐震性に関する不安を持っておられ、京都市が行っている木造建築物耐震診断士派遣事業による耐震診断を受けられました。実際に、診断結果は思わしくなく、このため知り合いの一級建築士(ニュープランの遠藤さん)の方に相談に乗っていただいたことが、今回の改修工事に踏み切られるきっかけとなりました。小規模な改修は、今までも行われていましたが、今回の改修では、耐震面をしっかりとさせた上で、床暖房を設置したり、床の段差を解消してバリアフリーにするなど、より暮らしやすいすまいにするという方針で改修が進められることになりました。

当初は、費用も相当かかることから、改修ではなく建替えも考えられたそうですが、今まで6世代が大切に住み継いできた歴史や、町家は京都の大切な文化のひとつで大事にしたいという思いから、保全・再生していこうと思われたそうです。

改修に際しては、当初、母屋の構造補強と床暖房、バリアフリー改修のみということで工事を始められましたが、以前に工事した小規模な改修の結果、母屋の構造が伝統構法(注1)と在来構法(注2)が混在したものになってしまっていたり、また



お庭も新しくされました

門や塀もかなり傷んでいたことから、最終的には大規模な改修を行うことになりました。施工は、株式会社カノ工務店の狩野さんにお願ひされました。

改修は、まず伝統構法と在来構法が混在していた構造を伝統構法(注3)のみの構造に統一し、限界耐力計算による耐震補強が行われました。また床組みを中心に腐食箇所・虫喰い箇所の部材を取り替えるなどしました。耐震性能を向上させるためには、壁量を増やせば良いのですが、意匠や使い勝手の面からも難しく、仕口ダンパー(注4)や荒壁パネル(注5)を使用して耐震性を高められました。今回の改修では、費用や手間の面からも、かなり力を入れた耐震補強がなされました。

「耐震に関しては完全ということはないが、できる範囲でベストな方法が取れた」と遠藤さん、狩野さんはおっしゃっています。今回のケースのような耐震補強は、費用などの面から難しいかもしれないけれども、もっと普及していくことが望まれるとのことでした。

これらの構造面での補強とともに、より暮らしやすいすまいにするための改修も進められました。改修前の間取りは、各部屋への動線が入り組んでいて、ど



仕口ダンパーと荒壁パネル

の部屋に行くのにも一度土間を通らなければならない状態でしたが、そうした点が解消されました。また、風呂やトイレなどの水回りが屋外にあり、大変不便だったのですが、今回建物の内部に納められました。そして洗面所からリビング、キッチンまでをオールガスの床暖房にするとともに、玄関からリビングまで段差を解消するバリアフリー工事が行われました。ただ吹き抜けに関しては、元の家のもっていた火袋の良さや面影を大切にするためそのまま残され、採光・通風上のアクセントになっています。設計者の遠藤さんは、「今回の改修に当たっては、町家の持つ本来の姿を復元することと、現代の暮らしに合うすまいの形を両立させることが難しかった」、また「耐震面でも非常に特徴のある改修となりましたが、現代にも生き続ける町家の再生のモデルのひとつとしてみていただければ」とおっしゃっていました。

改修を終えご主人は、「約8ヶ月間、離れに住みながらの改修工事でしたが、建築士さん、工務店の職人さんのすべてが町家のことについて大変詳しい方々でしたので、安心して改修工事を見守ることができました。思い入れのある家が残って本当に良かった。次は、母屋の西側にある蔵の改修を検討しなければ」とおっしゃっていました。

(注1) 伝統構法……金具等を使わずに柱や梁を組み合わせた京町家にみられる木造建築構法

(注2) 在来構法……筋交いや合板の壁などを持つ構造で、現在一般的に建築されている木造建築構法

(注3) 限界耐力計算……建物の特性に応じた性能を評価して構造を解析する新しい計算方法。伝統構法の建築物に利用することができる。

(注4) 仕口ダンパー……仕口とは、柱と梁の接合部のことで、この接合部を抜けるくくし、また地震等のエネルギーを緩衝する粘弾性体を組み合わせた金物

(注5) 荒壁パネル……建物の耐震性を向上させるために用いられる自然素材によって作られた板状の壁の下地材

関西木造住文化研究会 (略称: KARTH (カース))

～安心・安全の取組～

安心・安全を考える上で大切なこと

活動内容

関西木造住文化研究会 (略称 KARTH (カース)) は、「阪神・淡路大震災以降、今後関西でも起こりうる大地震発生までの間に私たちは何をすべきか」の答えを見つけるために、1998年に発足しました。「京都固有の木造伝統住文化と暮らしが調和した安心・安全のまちづくり」をテーマに、京町家をモデルケースとして、防火・耐震性能の向上手法の研究を、多くの学識経験者や、改修の団体等と協力しながら、積み重ねてこられました。その結果、まだ研究途上ですが、これまでの研究成果が、京町家の建築基準法適合へ向けた活動の重要な手がかりとなり、昨今の土塗壁に関する国土交通省告示改正につながる技術開発の契機となりました。そして将来、これらの研究成果が全国の伝統木造建築の防火・耐震対策に活かされることを目標にされています。

現在の取組

今年度は、「京都発2004シリーズ公開研究会」と題し、今までカースを含む各所で取り組まれてきた、伝

統木造住宅の防火・耐震性能向上手法の先端の研究成果を、市民や様々な分野の方にも分かりやすく報告し、防火・耐震上の課題の解決策を示す公開講座を7回開催され、来年度秋には総まとめのシンポジウムも予定されています。また、一方で既存京町家の防火改修手法の研究も進められています。



防火構造性能、防火改修手法の開発のための研究実験

その他、新潟県中越地震を契機に、震災後の被災地への復興支援情報提供を目的とする「KARTH地震ネット」を始められ、現在、22都府県約160箇所の方々に最新の支援情報を配信しています。また、カースの拠点の乾隆学区の方々の協力を得て、毎年秋の「西陣夢まつり」など



「2004京都・西陣夢まつり」での地震体験と勉強会の様子

で地域の方々の勉強会を開催され、地震・火災に関する知識を広げる取組も行っています。

代表幹事の田村さんは、「これまでの震災事例を教訓に、非常時の被害を最小限に押さえ、被災時でも自分たちの生活や地域の歴史文化を大切にしたい復興を迅速に進める方法を、日頃から皆で考えて整備していくことが重要です。住まいの耐震診断・耐震改修の他、すぐにできることはたくさんあります。日頃から住まいやその周辺の点検・手入れを行い、防火・耐震上の弱点をきちんと把握し、高い安全性が必要な部屋や避難経路などには、特に家具の転倒防止・ガラスの破損防止対策などをしておく。また、子どもや高齢者の方も含めて町内全員の方が、一人で家の中にいる時でも、各自、ケガをしないで安全に家の外に避難できる対策を町内の定期的な勉強会などで検討していくことなども大事です」とのこと。研究者の活動と災害時に大きな役割を担う市民の方々の日頃の心がけにより、京都のまちの安心・安全のまちづくりが進められることが望まれます。



伝統町家の再生モデル住宅

皆様にご協力いただいた「京町家まちづくり調査」(平成16年3月実施)を受け、「今後の京町家の保全・再生のあり方検討会」が発足しました!

センターでは、地域と共生する土地利用の促進事業を大きな柱として、京町家の保全・再生に向けて、市民、京町家所有者・居住者、専門家、市民活動団体との連携のもと、いろいろな取組を活性化していくネットワーク形成の充実に取り組んでいます。平成16年3月の市民活動団体やボランティアの皆さんにご協力をいただいた「京町家まちづくり調査」を受け、今後更に、調査結果を詳細に分析する中で、新たな具体的なアクションを起こすため、平成17年1月に「今後の京町家の保全・再生のあり方検討会」(以下「検討会」)を発足しました。

平成12年に京都市が「京町家再生プラン」を策定した

時には、学識経験者と行政関係部局だけでしたが、今回の検討会のメンバーは、個性豊かな活動を展開している市民活動団体、またセンターの専門相談に協力いただいている団体に参加していただき、広がりのあるネットワークの中で、個々の得意分野を活かした実践につながる具体的な取組を検討しています。1月の検討会では、市民や市民活動団体等や行政の連携の仕方や役割分担、そして防災や福祉、商業振興や景観等の観点から活発な意見が出され、現在こうした問題や課題をセンターでとりまとめています。

今後、まちなかの町家の減失している状況を把握するとともに、市民の方々からのたくさんのご意見や、近年の京都創生に向けての動きや景観法の施行などを踏まえながら、京町家をめぐる関心の高まりを単なるブームで終わらせないため、今後の方策につながる新たな提案や取組を積極的に行っていきたいと考えています。

景観・まちづくり大学

まちづくり情報発信セミナー(後期)を開催しました!

「まちづくり情報発信セミナー」では、現在京都の各地で取り組まれているまちづくりを紹介するとともに、現地見学も交えながら、参加された皆さんが今後のまちづくりに活かせるような情報や研究成果を提供しています。

「地域資源を生かしたまちづくり」

～伏見桃山・中書島地域の取組～

日 時：平成16年11月27日(土)

10:00～12:00

会 場：月桂冠株式会社 本社会議室

参加者：30名

伏見桃山・中書島地域は、「市街地の整備改善」と「商業等の活性化」を目的とした中心市街地活性化基本計画の適用地域となり、TMO「Town Management Organization(まちづくり会社)」を中心とした取組が行われています。

また、歴史的な酒蔵が残る美しい町並みは重要界わい景観整備地域にも指定され、多くの観光客でにぎわう地域ともなっています。

セミナーでは、月桂冠大倉記念館名誉館長の栗山一秀さん、株式会社伏見夢工房(TMO)の永山恵一郎さんを講師にお迎えし、地域の様々な資源を活かした取組についてお話をいただきました。

はじめに、栗山さんから伏見の成り立ちや歴史、地域特性から酒造りが産業として発展してきた経過についての講義をしていただくとともに、明治・大正時代から残る酒蔵を活用した取組など、地元企業としての地域のまちづくりへの貢献について説明していただきました。また、永山さんからは、濠川の清掃など、「まちの良さを地元の人に改めて知ってもらう」身近な活動を続けながら、地元の人たちとともに実現した「十石舟の運航」などの取組についてお話をいただきました。

講義の終了後には、昔の酒蔵を活用して酒造りについて紹介している博物館「月桂冠大倉記念館」を栗山さん、館長の藤井元三さんに案内していただきながら見学しました。



「伝統行事を通じた住民交流の取組」

～祇園祭山鉾町の事例を通じて～

日 時：平成16年12月11日(土)

13:00～15:00

会 場：鯉山町町席

参加者：25名

地域に新たに入ってきて来られたマンション住民との交流は、多くの地域でまちづくりの課題となっています。

セミナーでは鯉山町の町席(町会所)を会場に、祇園祭を通じてマンション住民との関係づくりを行っている山鉾町の取組を紹介していただくとともに、今後の方向性について意見交換を行いました。

はじめに、山鉾町が数多く存在する中京区明倫学区の自治連合会会長である吉田孝次郎さんから、祇園祭と「町」の関係についてお話をいただきました。その中では、約500年前には既に明文化されていたと言われる日常的な各町のルール(町式目)の中で町民の生活が営まれ山鉾が守られてきたこと、更に、それが現在まで少しずつ形を変えながらも脈々と受け継がれていることについて体験談も交えながら説明していただきました。また、休憩時間には普段は見ることができない鯉山の収蔵庫を特別に見学させていただきました。



セミナーの後半では、明倫まちづくり委員会の井上成哉さん、河野泰さんのコーディネートにより意見交換会を行いました。山鉾町の中でもマンション

住民との交流を積極的に行っている鯉山町と烏帽子屋町(黒主山)で活動されている6名(マンションにお住まいの方を含む。)をお招きし、近年の両町の状況と、祭への参加のきっかけや日頃の交流についてお話をいただきました。また、一般参加者からも多くの質問があり、祭など各々の地域の行事において現在抱えている問題、特に地域に新たに入ってきて来られる住民との関係づくりについて活発な意見交換が行われました。



景観・まちづくり大学(後期)を開催しました!

平成17年度も
景観・まちづく
り大学をよろし
くお願いいたし
ます!



京のまちづくり史 セミナー

大正時代以降のそれぞれの時代を背景に、京都の景観を市民がどのように意識してきたか、「京都の景観と保存」をテーマに全3回のプログラムで行いました。最終回には住民の積極的な取組による事例として祇園町南側地区を見学しました。



京町家再生 セミナー

後期は「NPO法人京町家再生研究会」の企画により実施し、様々な視点による京町家の再生・活用についての情報提供を行いました。また、各セミナー終了後には相談会を実施しました。



展示案内ポラン ティアセミナー

京のまちづくり史を基本に「京のまちかど」の展示内容や案内の仕方について学ぶだけでなく、まちづくり現地見学会を春日学区において実施し、まちづくり現場の見学と、まちづくりを実践している方のお話を聞きました。

専門家セミナー

登録制のセミナーとして実施し、「マンションと地域コミュニティ」をテーマとした研究会と、「情報技術とまちづくり」をテーマとした意見交換会を行いました。

平成16年度賛助会員 敬称略(五十音順)

H17年2月末現在

【個人】

青柳 敏雄	岩城千恵子	海堀 安喜	坂本 登	田辺 真人	成瀬 英夫	福島 健一	森澤富久造
青山とうこ	上野 明彦	笠岡 英次	佐竹 和男	谷口 一郎	難波 邦弘	福島 貞道	柳原 明子
芦田 英機	上原 任	勝矢 佳子	島崎 耕一	谷口 進	西川 壽磨	藤本 春治	山田 高次
菖蒲 修治	上原 智子	桂 豊	島田與三右衛門	谷脇 郁夫	西島 篤行	平家 直美	山本 一宏
石田 治	宇高 史昭	加藤 昭	白須 正	谷脇 郁夫	西嶋 直和	星川 茂一	山本 一馬
石田 達	江草 哲史	亀井 孝郎	新喜 富雄	勅使河原拓	野原 康	正木 敦士	山本 耕治
石原 一彦	江田 頼宣	川上 輝夫	寿崎かすみ	寺田 恵子	長谷川忠夫	松田 彰	山本 七重
石村 陸貴	大島 仁	川口 東嶺	園 孝裕	寺田 敏紀	畑中 政治	松村 光洋	湯浅 博央
井手 正己	岡崎 篤行	上林 研二	高木 勝英	寺田 史子	林 建志	馬屋原 宏	吉川 雅則
糸井 恒夫	岡野 哲也	岸田里佳子	高木 伸人	寺本 健三	林 幹夫	溝上 省二	吉田 香
稲石 勝之	岡本 晋	北川 洋一	高谷 基彦	永井久美子	播摩 和美	南 寛	吉田真由美
稲波 良幸	岡本 秀巳	木村 忠紀	武居 桂	中井 秀和	人見 米一	宮川 和久	善積 秀次
犬伏 真	奥 美里	木村 賀正	田中 照人	中川 慶子	平竹 耕三	武藤 弘一	淀野 実
今井 邦光	奥山 脩二	桐澤 孝男	田中 治次	中島 吾郎	平竹 洋子	毛利 信二	鷺頭 雅浩
今井麻紀子	小山 選一	金辻 俊一	田辺 鈴賀	中島 康雄	吹上 裕久	森澤 正一	渡邊 隆夫

他全122名の皆様

【団体】

- アジア航測株式会社京都支店
- 大阪ガス株式会社近畿圏室
- 大阪ガス株式会社京滋リビング営業部コミュニティ室
- オムロン株式会社
- NPO法人京滋マンション管理対策協議会
- 京都駅ビル開発株式会社総務部
- 社団法人京都府建築士事務所協会
- 有限責任中間法人京都不動産投資顧問業協会
- 株式会社ジェイアール西日本伊勢丹
- 財団法人手織技術振興財団
- 西日本電信電話株式会社京都支店
- 花豊造園株式会社
- NPO法人マンションセンター京都
- NPO法人みどりのまちづくり研究所
- ローム株式会社

パートナーシップで進める 未来に向けたまちづくりを目指して

京都市景観・まちづくりセンターでは、平成16年度からはじまる中期経営計画で、各種まちづくり関連団体との連携の強化を図っています。共催した事業総数は、17事業にのぼります。

ここでは、今年度に共催した事業のうちいくつかの事業をご紹介します。

安全・安心の地域づくりシンポジウム

暮らしの安全・安心は、どの地域でも大きな課題です。平成16年5月28日に、「春日住民福祉協議会」、「京都市福祉ボランティアセンター」及び当センターの3者の共同企画により、「安全・安心の地域づくりシンポジウム」を開催し、約200名の市民の方々に参加していただきました。

基調講演は、地域コミュニティ再生研究の第一人者である中田實氏（愛知江南短期大学学長、コミュニティ政策学会会長）に安全・安心の地域づくりのために地縁コミュニティの果たしうる可能性について講演を行っていただきました。

パネルディスカッションでは、長谷川和子氏（KBS京都プロデューサー）にコーディネーターを務めていただき、中田實氏、高瀬博章氏（春日住民福祉協議会会長）、前田利正氏（京都市消防局市民安全課担当課長補佐）、大谷善一氏（京都市福祉ボランティアセンター長）、および当センターの奥事務局次長が、それぞれの立場からの報告を行った後、会場の参加者の方々とともに地域での取組事例などを交え、地域の安全・安心のために地縁コミュニティの担うべき役割や課題などについて話し合いを行いました。

景観・まちづくり大学の共催事業



こどもまちづくりセミナー

まちづくり関連の各種団体との連携として、日本建築家協会近畿支部京都府との「こどもまちづくりセミナー」、京町家再生研究会との「京町家再生セミナー」を開催しました。こどもまちづくりセミナーは、日本建築家協会近畿支部京都府の「建築とこどもたち」の第3回として開催されました。子どもたちと一緒に三条通を探検し、歴史的な建物やオブジェなどを見て歩きました。また、子どもたちが三条通の「いいところ」を写真に撮り、ガリバーマップを作りました。約30名近い子どもたちが元気に参加してくれました。

「京町家再生セミナー」の後期実施分は企画段階から京町家再生研究会と議論を重ね、これまでと少し異なった切り口を変えたセミナーに取り組むことができました。

現在の京町家所有者に加え、これから京町家に住んでみたい人も含めて受講対象にし、活用方法や改修事例を紹介しました。

6回にわたるセミナーはいずれも約50人前後の受講があり、定員を超える盛況振りでした。

その他の共催事業

ここで紹介した事業以外にも、14の共催事業があります。このうち、米國カーネギーメロン大学と共催した「日米学生共同セミナー」や、京都市と共催した「京都市コミひろサミット」は当センターのニュースレター第28号、第29号で紹介しています。



日米学生共同セミナー

中期経営計画と今後の共催事業

平成16年度から始まる中期経営計画では、センター施設が地域住民、市民活動団体、企業によって調査・研究活動、情報交換・発信の気軽に利用できる場となることを目指しています。これを達成するために、大学等の研究機関との連携や図書コーナーの蔵書の充実とともに、これまで以上に各活動主体の自主的取組との共催・協賛などに取り組んでいきます。

■共催事業一覧

平成17年2月末現在

事業名	共催団体名
安全・安心の地域づくりシンポジウム	春日住民福祉協議会 京都市福祉ボランティアセンター
「住まいの学校」竹と和紙の照明創り教室	NPO法人 古材バンクの会
日米学生共同セミナー	カーネギーメロン大学
京都の景観・街づくりにおける景観シミュレーターの利用（御池通の将来CGプレゼンテーション発表会）	京都大学、京都商工会議所地域開発・都市整備委員会
住まいのなんでも交流博	社団法人 京都府建築士事務所協会
子どもまちづくりセミナー	社団法人 日本建築家協会近畿支部京都府
「京のまち探検隊」～三条通のひみつ発見～	京都市
京都市コミひろサミット	京都市
三条あかり景色プロジェクト	楽洛まちづくり会、どうする京都市民クラブ、京都映画祭実行委員会
連続講演会「終のすみかと暮らしを考える」	NPO法人 きょうとNPOセンター
景観講座「美しい都市-京都・都心界隈からの発信」	NPO法人 都心界隈まちづくりネット
京町家再生セミナー	NPO法人 京町家再生研究会
公共建築の日「公共建築って何だろう」	近畿地方整備局京都管轄事務所
京都「北山丸太」で建てるフォーリーデザインコンペティション2004	京都北山丸太連合会
京都学講座 日本の民家と京町家	Kissポート財団
歴史都市の景観と建築空間構成に見る関西圏の文化特性	「歴史都市の景観と建築空間構成に見る関西圏の文化特性」研究委員会
伝統的建築保存活用マネージャー養成講座	NPO法人 古材バンクの会
住まい・まちづくり活動の今後のあり方に関する研究委員会	住まい・まちづくり活動の今後のあり方に関する研究委員会

私と京都



春日住民福祉協議会会長
高瀬博章

安全で、安心して暮らせるまち

私の住むまち春日学区（上京区）は、西に京都御所、東に鴨川に挟まれた地域である。市の中心部の例に漏れず少子高齢化が進んでいる。学区の全世帯は1,100世帯、人口は2,500人と京都市221学区でも小規模学区に属している。

私は、こんな環境にある地域で「安全で安心して暮らせるまち」を目指し、ボランティア活動を続けてきたし、これからも続けていこうと思っている。私がこうした活動を始めるきっかけとなったのは、昭和47年、鴨川のほとりに11階建ての高層ビル建設問題が起き、付近7ヶ町の人々とともに住環境を守る取組

に汗を流したことである。また昭和54年、学区内に住む障害のある高齢者が、タバコの不始末から火事を出し焼死される事件があり、学区役員や行政各団体とともに「見守りができていれば、火事が防げたのでは？」との共通認識を持つに至ったことも大きい。

これを契機に福祉と防災を一体で進める春日学区のまちづくり活動を本格的に始めることとなった。そのような取組を続けてきたおかげで昭和60年にひとり暮らしの高齢者を狙った豊田商事事件が社会問題になった時にも、防犯委員と警察の連携により未然に防ぐことができた。また平成6年の児童虐待事件の時にも、小学校を中心に児童相談所、警察と地域住民がネットワークを組み対処できた。これらはほんの一例に過ぎない。ひとつひとつの問題にぶつかると、組織を強化し会合を重ねてきた。その結果、ハード面は自治連合会、ソフト面は住民福祉協議会、防災面は自主防災会と全学区住民で役割分担を行いつつ相互の連携を密にすることにより、春日学区のまちづくりの体制が強固になっていった。

地域活動を進める上で、情報の共有は欠かせない。具体的な取組の一例を紹介したい。

- ・広報紙「春日だより」（昭和48年から毎月1回、全戸配布）

自治・福祉・防災に関する地域の様々な活動や専門機関の催し、専門情報などを知ることができる。住民にとっての情報源であり、地域活動の啓発にも大いに役立っている。住民が家庭に居ながら活動に参加していることにつながる。

- ・「春日学区福祉防災マップ」（昭和58年初版発行、全戸配布、以降2年に1回改訂版作成）
学区地図に各世帯を記し、防火水槽、消火栓、防災器材庫、広域避難所等の位置や、福祉・防災等に関する行政・専門機関の連絡先等、住民に役立つ情報を記載してある。また、このマップで「要配慮者」の家庭の把握を行いながら、見守り訪問等の福祉活動に活かしている。

春日学区では広報活動（春日だより）と実態把握（福祉防災マップ）をベースにしながら、活動を32年間にわたり住民みんなで積み上げることで、多岐にわたる広がり発展させることができたものである。地域の福祉力・防災力を高めるためには、そこに住む人々が自主的に活動し、行政諸団体とのネットワークを太くすることが不可欠だと思う。そのためには、「ああ、春日学区に住んで良かったなあ。これからも住み続けたい」という課題を模索しながら、春日から発信して、京都がますます住みよいまちになることを祈念している。

《センター解説アワー》

「景観法」の制定について

平成16年12月17日に、都市、農山漁村等における良好な景観の形成を図るための総合的な法律である「景観法」が施行されました。

景観法は、美しく風格のある国土の形成、潤いのある豊かな生活環境の創造及び個性的で活力ある地域社会の実現を図ることを目的としており、「景観」を国民共通の財産と位置づけています。

法の内容は、地域の自然、歴史、文化、人々の生活、経済活動と多岐にわたり、景観形成についても、単に保全ということだけではなく、新たに景観を創造することも視野に入れたものとなっています。

具体的な内容としては、都道府県や市町村が、良好な景観の保全や形成を図ることが必要な区域を景観計画区域とし、良好な景観の形成に関する方針やそのための行為の制限に関する事項等を景観計画として定めます。また、より積極的に景観形成を図るべき区域については、景観地区として指定することもできます。更に、良好な景観形成に重要な建築物等については、景観重要建造物として指定することもでき、これについては、数多くの優れた町家を有している京都にとっては非常に注目すべき点です。

また、「地域の活性化に資する景観形成に向け、地方公共団体、事業者及び住民の一体的な取組が必要である」と法に明記されたことも注目すべき点として挙げられます。

今後、当センターも含め、住民、事業者、行政の連携と協力による法の活用が期待されるところです。

センター語録

昨年の4月に京都市景観・まちづくりセンターへ来てから、1年が経とうとしています。主に京町家に関わる業務を担当させていただいていますが、最近、京都の伝統建造物としての町家、住まいとしての町家、まちの資源としての町家がどのようなものなのか少しずつ見え始めているように思います。

大学時代にもまちづくりに関心を持ち、農村の持続可能なまちづくりについて研究をしていました。対象の地域は、私の生まれ育った九州・大分県の、人口約5,300人の山間部のまちです。まちの魅力は、秀峰、溪流の豊かな自然と地域の人々の温かさで、その風景や人間関係は今もかわらず続いています。日々の生活の中で当然のように慣れ親しんできたまちに改めて関心を持つ中で、そこに住む人々に会いまちへの想いを聴くことで、隠れた「人」としての資源を見つけることができました。

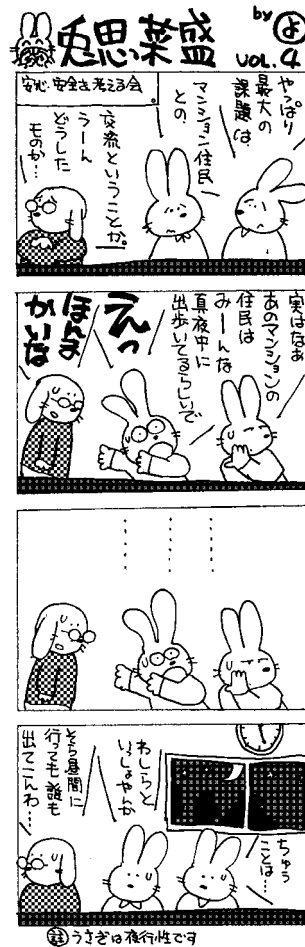
京都のまちと九州の農村とは、人

口、産業、自然環境、積み重ねた歴史など多くの点で異なります。しかし、そこに住む人がまちを担い、まちを創造していくことに変わりはないと思います。今、京都市景観・まちづくりセンターの職員として、市民の方々と協働のまちづくりを進めていく立場になり、改めて「聴くこと」の大切さを感じています。

これからは、まちの出来事に日々関心を持ちながら、聴くだけでなく、聴いたことを吸収してセンターの事業に活かしていけるよう、日々の業務に取り組んでいきたいと思っています。

京都に住み7年になりますが、憧れの目で見ていた京都も、今では一生活者としての視点に変化してきました。これからも、センター職員として日々学びながら、皆さんとともに、まちの居心地の良い空間づくりに取り組んでいきたいと思っています。

(景観・まちづくりセンター事務局 S・M)



センターからのお知らせ

京都市景観・まちづくりセンターホームページ

<http://machi.hitomachi-kyoto.jp>

センターの取組内容をはじめ、まちづくりに関する様々な情報を発信するホームページ。

皆さんの地域のイベント情報、まちづくり情報も掲載します。メールマガジンの登録も受付中です。



センター活動拠点のご案内

京都市景観・まちづくりセンター

〒600-8127 京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湊町83番地の1 (河原町五条下る東側)

「ひと・まち交流館 京都」地下1階

TEL 075-354-8701

FAX 075-354-8704

e-mail : machi.info@hitomachi-kyoto.jp

●開館日 (相談の受付等)

9:00 ~ 21:30 (月曜日~土曜日)

9:00 ~ 17:00 (日曜日・祝日)

●休館日

毎月第3火曜日 (国民の祝日に当たるときは翌日)

年末年始 (12月29日~1月4日)

なお、センターへのお越しの際は公共交通機関をご利用ください。



賛助会員の募集 (平成17年度分)

平成17年度の賛助会員を募集しています。京都のまちづくりに貢献したい！センターの活動を応援したい！そんなあなたの熱意をお待ちしています。

【特典】

- ・ニュースレター (年4回・季刊) の送付
 - ・冊子等センター発行物の割引
 - ・ニュースレターでの活動紹介
 - ・シンポジウム、セミナー等への優待
- 賛助会員の方は、景観・まちづくり大学のすべてのセミナーを無料で受講できます。(賛助団体の方はひとつのセミナーで3人まで受講可)

【年度会費】

個人1口：5千円 団体1口：5万円

まちづくりフレンズの募集

地域のまちづくりに関する各種イベントや啓発・学習活動にボランティア・スタッフとして参加していただける方を募集・登録しています。